

して、彼女に「それはどんなにきれいなことでしょかね」と言わしめている。ただし、「私」は見る世界と音の世界とがいかにも吐露している（中村真一郎訳、講談社文庫）。

『田園交響楽』の「私」が苦心したように、通常見る世界と音の世界は別に処理され意識されるが、およそ十万人に一人、共感覚という特異な脳の能力を持つ人たちがいる（シトーウィック『共感覚者の驚くべき日常』草思社）。

ウオード『カエルの声はなぜ青いのか？』青土社。共感覚を持った人は、ポケベルの音を聞くと赤い色が見えたり、掃除機の音を黒く感じたりする。彼らの五感が入り交じっており、ある文字を見ると特定の味を感じたり、他者の痛みを自分のものと感じる人もいる。一説に新生児は誰もが共感覚を持っているが、成長に応じて分化していくという。すなわち、新生児は

一つの感覚を持って生まれ、感覚を通じて外部世界を体験することにより多感覚になっていくとされる（ウオード前掲書）。

近年、クオリアという概念が脳科学や哲学、物理学の世界でいわれるようになった（茂木健一郎『脳とクオリア』日本経済新聞社）。クオリアは感覚意識体験などと訳され、主観的な感覚とそれによって得られる心の状態などをいう。ある解釈によれば、世界はそのものとしてあるのではなく、クオリアが作り上げたものとされる。新生児以来、ヒトが現実世界と確信しているものは、実は感覚器官によつて受容された情報で脳が再処理して構築したものという（渡辺正峰『脳の意識機械の意識』中公新書など参考）。

門外漢ながらこうした現代科学の所説を垣間見ると、すではるか以前、同様のことを仏教が説いていることに一驚せ

ざるを得ない。かつて筆者はエストニアの生物学者ユクスキユルが解明した種々の生物の環境世界・知覚世界・作用世界は、「般若心経」などの界・受・行と同様であると述べたことがあるし（拙著『文学・美術に見る仏教の生死観』NHK出版）、ここに触れたクオリアも空観の説と重複する。先述の現代科学がいう新生児の成長の過程も、仏教の本性清浄と染汚の思想と一致する。仏教諸派が説くところを敷衍すれば、人間は本来汚れなき無垢の状態生まれ、ありのままの世界を受容している。しかし五根を通じて体験により「汚れて」いき、自分の感じた世界を事実と誤認するようになる。成人にとつて新生児の世界は渾沌と思えるが、主観によつて分節された世界こそ、仏教では顛動すなわち誤りと説く。これよりすれば赤ちゃんも主客もない自他不二の世界、す



木版画『桜散る飯繩権現堂前大鳥居にて』  
作・井堂雅夫

院内散歩 14  
薬王院の展示物

なわち仏と同じ世界に生きていくことになる。

自他不二の世界とは、エゴを捨てた慈悲の心である。慈悲心は自他や世界を主観的に分けて捉える顛動の世界には生まれ

ず、新生児のように五根も世界も未分化の清浄な世界に生まれる。まさにそうした心、世界にあるからこそ、観音菩薩は「音を観る」ことができるのであろう。

観音菩薩の宗教 ③

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

「音を観る」の意味を考える

これまで観音菩薩が哲学的側面と信仰上の人気の側面から、大乘仏教を代表する菩薩であることを見てきた。後に述べる予定であるが観音菩薩は、観自在菩薩とされることもある。両者の違いを明らかにする前に、今回は日本などの漢文仏教圏で最も流布した「観音」の意味を考察してみたい。

「観音」とは漢文の文法にしたがって訓すれば、「音を観る」と読める。我々が持つ感覚は、一般的にはギリシャのアリストテレスの五感、すなわち視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚に分類されている。仏教においても、感覚器官は眼・耳・鼻・舌・身の五根とされる。五根の

中には靈感のような第六感やESP(超感覚的知覚)、現代の医学で知られるようになった内臓感覚などは含まれないが、仏教の伝統においても感覚器官が五種に分類されてきたことは明らかである。つまり、「眼で見る」「耳で聞く」「鼻で嗅ぐ」「舌で味わう」「皮膚で感じる」ということであり、その対象である「境」は色・声・香・味・触である。五根、五境の思想は、『般若心経』などを通じて広く知られてきた。

こうして見ると、「音を観る」はこれらに当てはまらないことがわかる。このことをどう考えたらよいか、まずは仏教学の外から考えてみよう。解剖学者の養老孟司

氏によれば、耳の伝音系すなわち中耳は、脊椎動物が水生であった当時の鰓から生じたものという。聴覚はもとは運動系で、感覚系の視覚とは発生学的に別の系統に属するものであった。ところが、人間の脳では視覚と聴覚を共通の情報処理規則とし、人間の言語を作り上げたとされる。それによれば、視覚に属する文字言語と聴覚に属する音声言語が脳内で統合されて人間の言語になったとい

う（養老孟司『唯脳論』青土社、同『形を読む』培風館、同『考えるヒト』筑摩書房）。養老氏は、音と図形を同じ情報処理の中に位置づけた例として、日本語における漢字の音訓読みや、マンガの絵とフキダシを挙げている（『考えるヒト』）。とはいえ、それぞれの感覚は別の対象を持つっており、ほとんどの人にとって聞くことと見ることは別の感覚として実感される。両者が一体化するの

は特別な場合である。フランスの小説家アン・ドレ・ジッドは、文学作品の中で色彩を音によって表現しようとした。一九一九年に発表された彼の『田園交響楽』には、「私」が盲目の少女ジェルトリュードに色と明るさを教える場面がある。そのさい「私」は、ホルンやトロンボーンの音色を赤と橙色に、ヴァイオリンやチェロやバスを黄色と緑に喩え、さらには苦みつつ白や黒を説明



流木から彫り出された観音像(薬王院大本堂)